

# I 総論

従来ある地域に生育している植物的自然の把握方法として「植物誌（フロラ）」の編纂が行われてきた。「植物誌」は、その植物の生育地とともに植物目録が整理されたものがほとんどであり、植物の種レベルでその分布または産地・生活形・生活期間・開花期・繁殖形などを解析する、いわゆる植物分類学的手法によったものである。他方では同じある地域に生育している植物的自然の把握方法でも、その地域の景観を構成している植物の集まり、つまり植物群落を対象とした植物社会学的な把握の方法がある。すなわち植物誌に対応した「植生誌 Gebietsmonographie der Vegetation」である。「植生誌」は、ある地域のそれぞれの場所のあらゆる環境条件・立地条件の総和に対応した植物的生命集団、すなわち植生（Vegetation）を対象に、群落の相観、種組成、構造、分布、遷移、他の群落との対応関係などを解析し、総合する。植物分類学的方法に対して植物社会学または植物生態学的方法といえる。

今回の調査・研究は、「千葉市の植生誌」作製を目指して千葉市を中心に、千葉県中部～南部の調査資料とも比較検討をしながらすすめられた。同時に植生調査結果と、それにもとづく植生単位の具体的配分図として現存植生図および潜在自然植生図が縮尺 1 : 25,000 で千葉市市街化区域およびその隣接地域について描かれた。

## 1. 千葉市の地域概況

i) 歴史：千葉市は1126年千葉常重によって猪鼻台に城郭をきずかれて以来、約 330 年城下町として栄えた。その後、江戸時代半ばから、下総の国堀田藩の積出港として、また江戸街道の宿場町として農村から都市へと発展しはじめた。明治時代に入って、千葉県々庁がおかれ県政の中心地として、また大東京・首都圏の衛星都市として人口の流入が続いた。昭和20年、千葉市は都市建造物の70%を灰燼にする大火にみまわれ発展が一時停滞した。戦後、千葉商港の建設、臨海埋立て工場群の設置などを契機に、京浜工業地帯に対する京葉工業地帯の中心地として産業的、経済的には急速に発展して現在にいたっている。

ii) 地形・地質：千葉市の地形は南北のちがいがより東西のちがいが著しく、下総台地と千葉平野に分けられる。下総台地は内陸の若松町台地の海拔35mから海岸に向かって段階状に海拔高が低下し、台地末端で約20mの断崖をもって千葉平野と接する。また黒砂、稲毛では海拔約20mで海岸線にせまっている。台地は花見川、都川などの各河川およびその支流が侵食谷をつくり、木の枝のような地形がきざみこまれている。千葉平野は、北に花見川、南に都川が流れ、かつての潟湖が隆起した、より内陸側の都川平野と砂質で遠浅な海底の隆起により陸化した海岸平野とからなりたっている。

下総台地の地層の大部分は赤褐色の砂層で小石・軽石や貝類その他の化石を含む成田層上に赤

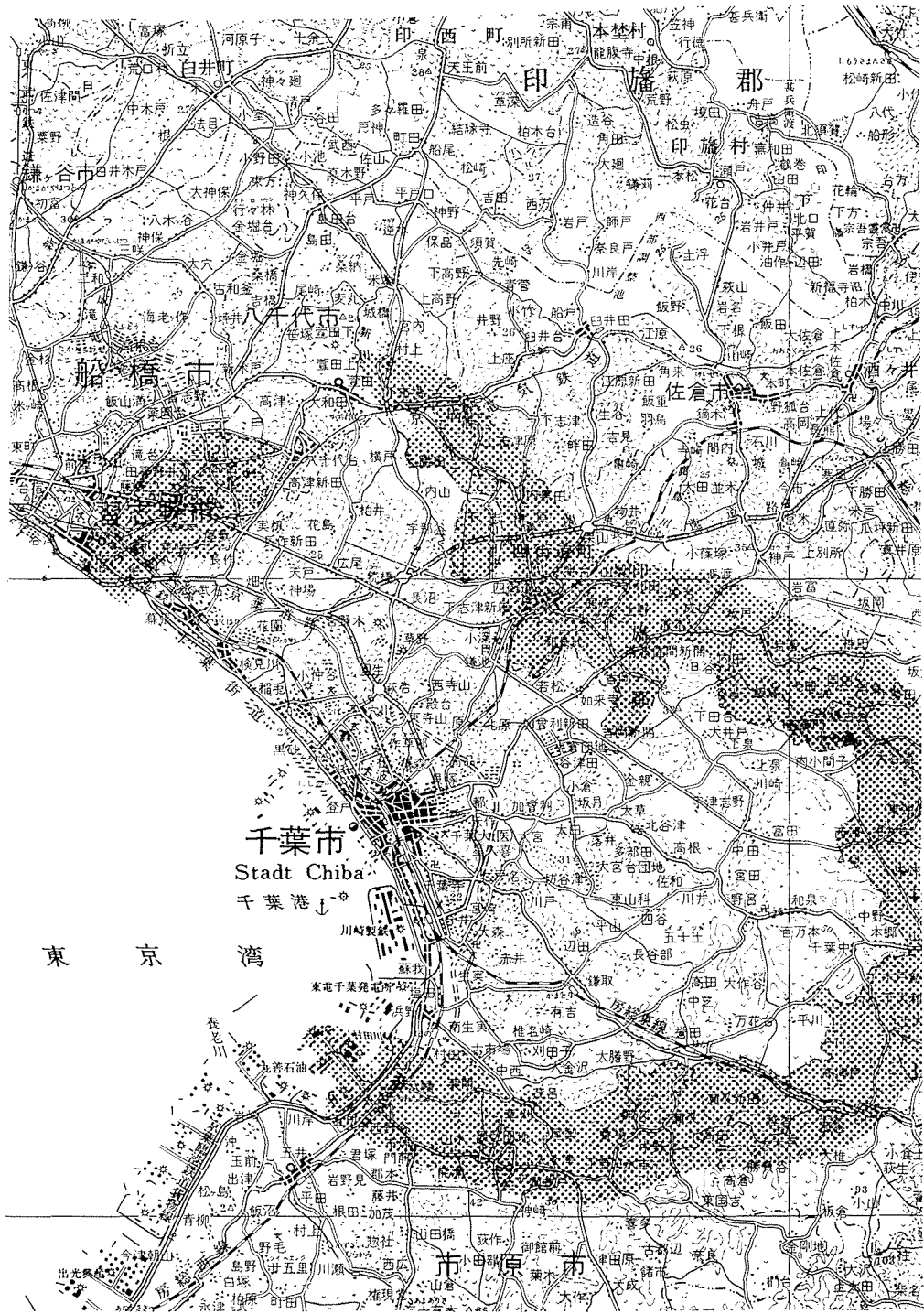


Fig. 1 千葉市全域概観図  
Übersichtskarte des gesamten Areals der Stadt Chiba



Tab. 1 気候年表（千葉測候所，1972年）  
 Meteorologische Daten für die Stadt Chiba (Angaben für 1972 von Wetterwarte Chiba)

月別 Monat	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	年
種別 Angabe	Jan.	Febr.	März	April	Mai	Juni	Juli	Aug.	Sept.	Okt.	Nov.	Dez.	
気温 (°C) Lurttemperatur													
平均 Mittel	6.9	5.3	9.3	13.2	18.3	21.0	25.1	26.4	22.9	18.4	12.2	7.8	15.6
最高平均 Maximum	11.4	8.6	13.5	17.1	22.0	24.5	28.5	29.9	27.1	22.9	16.6	12.1	19.5
最低平均 Minimum	2.5	2.2	5.0	9.1	14.5	17.8	22.4	23.7	19.5	14.5	7.6	3.1	11.8
湿度 (%) 平均 Humidität	62	61	57	68	69	74	76	73	73	68	62	62	67
降水量 (mm) 合計 Niederschlag	142.5	131.5	30.5	146.0	48.0	96.5	154.5	100.5	185.5	64.5	63.5	136.5	1300.0
風 (m/s) Wind													
平均 Durchschnitt	3.0	3.2	4.0	4.3	5.2	4.4	5.9	5.9	3.7	3.8	3.4	3.5	42
最多風向 häufigste Windrichtung	N	N	N	N	SSW	NNE	SSW	SSW	NE	NE	NW	N	N

褐色の関東ローム層が堆積しており，台地上で谷頭浸蝕によりえぐられたところでは関東ローム層をほとんど欠き，成田層が露頭している斜面もみられる。これら約200万年前の第4紀の洪積期に形成された地層よりなる洪積台地に対して，現在の千葉平野と台地の谷底地や浅海の陸化した沖積低地は，沖積期に台地から流出する河川の運搬土の堆積により形成された沖積層からなる。

iii) 気候：千葉市の気候は太平洋岸（表日本）の季節風気候下にある。年平均気温 15.6°C（以下データは1972年千葉測候所による），年間降水量1300mmで，夏季は南九州，南四国，紀伊半島南部や千葉県南～南東部ほど暑熱，多雨でない。冬季の湿度も月平均60%と関東地方の内陸部ほど乾燥，冷涼でない。また冬季は北風が卓越する。この風は筑波風とか赤城風とか称されるいわゆる空っ風で，関東平野を吹きぬけていく。そのため下総台地では屋敷林や生垣で家を囲み，畑の土壌飛散防止や作物をまもる平地林によって畑をぐるりと囲んでいる。

iv) 土地利用：千葉市内には10ヶ所を越える縄文時代の貝塚が発見されており，人々が定住するようになってからの歴史は古い。しかし，下総の国（かつて千葉市もその一部）が“石なしの国”，“水なしの国”，“山なしの国”といわれたように，武蔵野台地から続く洪積台地上は厚さ3～6mの関東ローム層に被われ地下水位が低く水が得がたかった。そのため洪積台地の積極的な土地利用，開発はおくれ，アカマツ，スギ，ヒノキの植林，落花生畑，ケヤキ，シラカンなどで囲まれた屋敷，そして薪炭林として利用されてきたクヌギ，クリ，コナラ，イヌシデなどの夏緑広葉樹の二次林がモザイク状にみられる。洪積台地に延びる谷地低地は水田として利用されている。沖積低地は，港や江戸街道ぞいに発達した旧市街地とその内陸側の低湿地の水田が代表的で

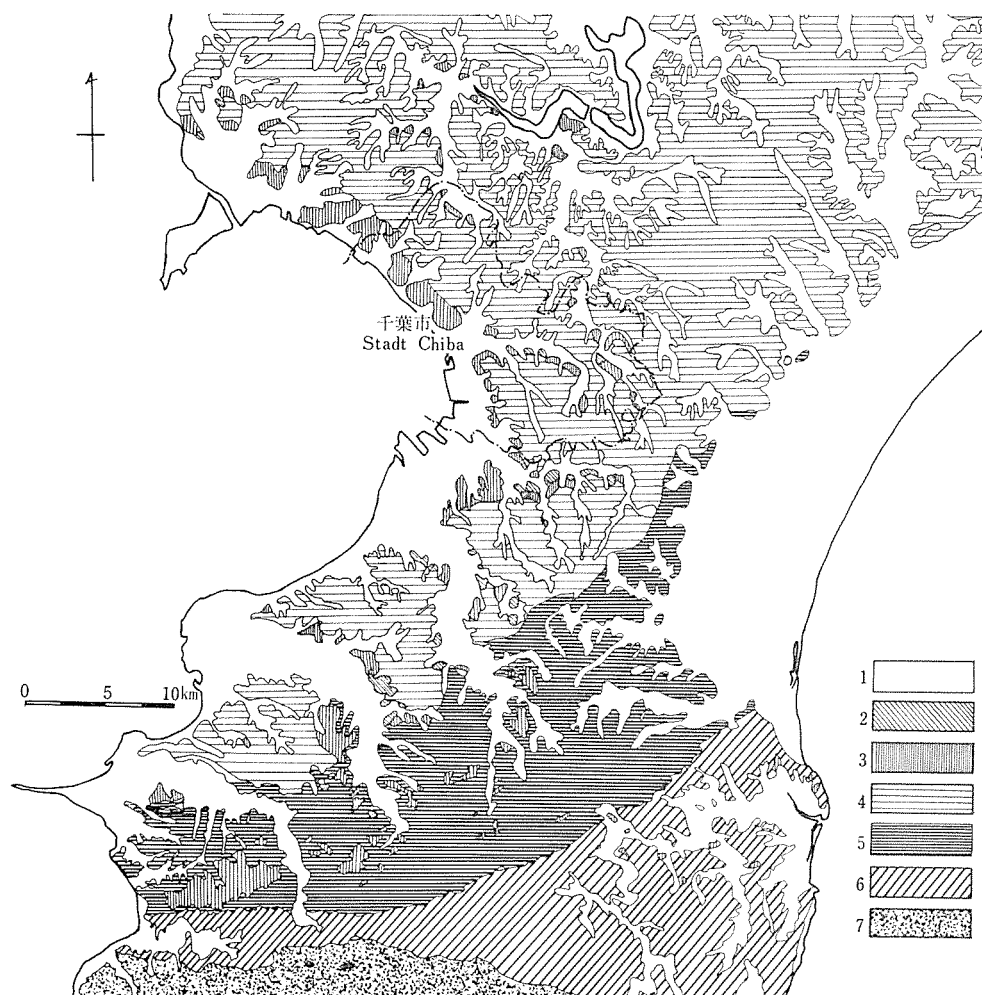


Fig. 2 千葉市およびその周辺の地質図  
Geologische Karte der Stadt Chiba

1. 沖積層 Alluvium
2. 立川ローム層 Tachikawa Loam
3. 武蔵野ローム層以上 Musashino u. Tachikawa Loam
4. 下末吉ローム層以上 Shimosueyoshi, Musashino u. Tachikawa Loam
5. 海成中, 下部洪積統 Mittleres u. älteres Diluvium
6. 鮮新統 Pliocene
7. 中新統およびそれ以前の中期岩類 Miozän

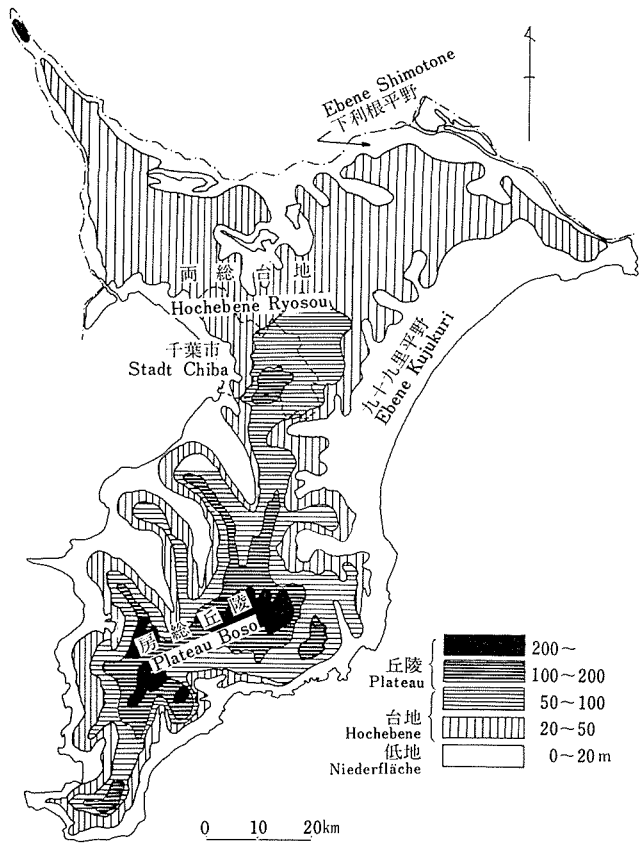


Fig. 3 等高別地形図  
Isohypsenkarte

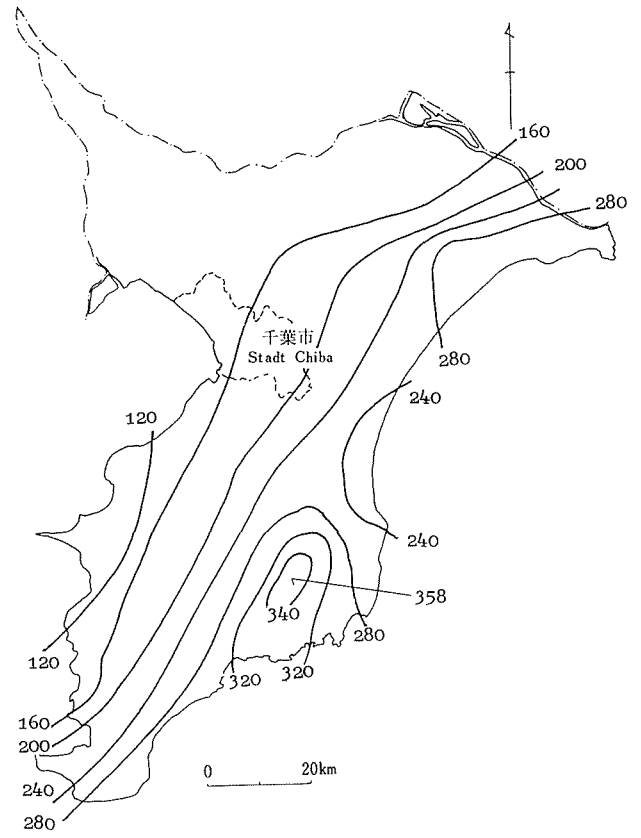


Fig. 4 月間降水量分布図 (mm)  
Verbreitung der monatlichen Niederschlagsmengen (mm)  
1972年12月 (Zustand vom Dezember 1972)

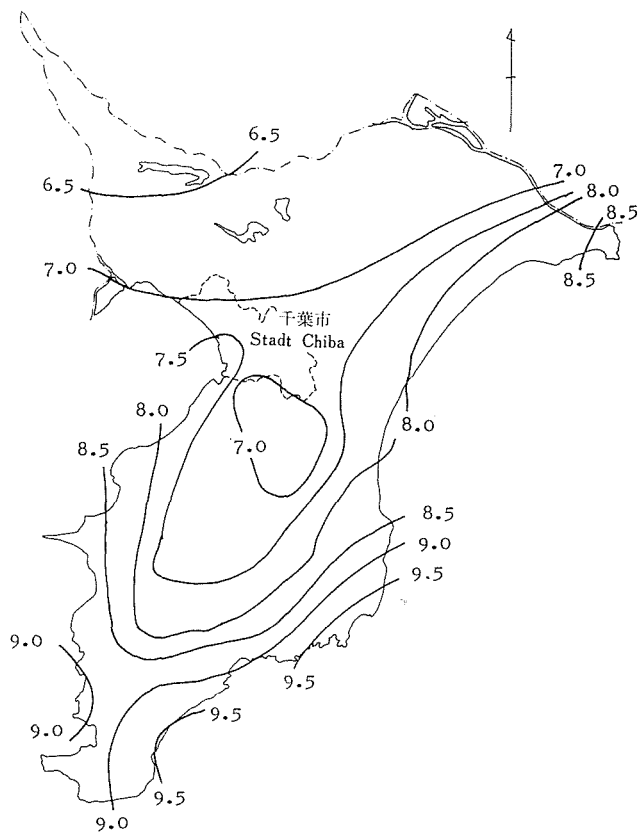


Fig. 5 月平均気温分布図 (°C)  
 Isothermenkarte vom Dezember 1972 (°C)  
 1972年12月

ある。千葉市の海岸線は、かつて東京港に面した長い砂丘を形成していたが、埋立てが進み、新しい産業立地、近代都市として発展をとげている。

反面、かつて広く千葉市域を被っていたと考えられる台地上のスダジイ林、斜面下部や谷状部のタブノキ林、内陸部のシラカン林に代表されるような郷土の森や緑豊かな田園景観は急速に消滅の方向に向っている。とくに海岸部では、ほとんど自然植生やそれに近い植生は失われている。

## 2. 千葉市の植生概観

ハンノキ林やヨシ、カササゲ草原が生育する湿潤地や流水域、短茎の草本植物がかるうて生育する海岸風衝地では、気候的要因と同時に強く土地的要因によって制限された植生が生育する。土地的要因によって限定された植生が生育する限られた立地を除いた大部分の地域の自然植生ま

たは潜在自然植生から千葉市の植生をみると、田中壤(1868)が大日本植生物調査報告でいう黒松帯、本多静六(1912)が日本森林植物帯論でいう“暖帯林、亜熱帯林あるいは樺帯”にあたる。植生学、植物社会学的視点では、鈴木時夫(1962)のいうクスーカシクラス *Lauraceo-Fagaceetea sempervirens* そしてのいうヤブツバキクラス *Camellietea japonicae* にまとめられる(宮脇・大場1963)常緑広葉樹林域にある。

ヤブツバキクラス域は、ヤブツバキクラスに含まれる常緑広葉樹を主な構成種とする群集あるいは群落の生育域である。広域的に決定されたクラスの標徴種はヒサカキ、アオキ、ヤブツバキで、ヤブツバキクラス域は、吉良(1949)による温量指数85~180°、寒さの指数-10°以上の地域とはほぼ一致する(宮脇他1971)。海拔約50m以下で房総半島に位置する千葉市域はヤブツバキクラス域に属する。

ヤブツバキクラス域は、本州の東北地方南部から、海拔800m以下の本州・四国・九州さらに琉球列島が含まれる。関東地方では海拔700~800mで夏緑広葉樹林域あるいはブナクラス域に移行する。

千葉市に生育するヤブツバキクラスの群落は、マサキートベラ群集、シラカシ群集、イノデータブ群集とヤブコウジースダジイ群集である。しかし、これら常緑広葉樹の自然植生が残存・生育するところは、神社林や寺院林、台地斜面保全林、防風や飛砂防止の意味もある屋敷林などに限られる。

我が国の他の文化景観域と同様に千葉市の植生の大部分は、自然植生が破壊されたあとに生育する代償植生である。耕作畑には一年生草本植物群落、耕作放棄地には越年草本植物群落や多年生草本植物群落など人為的干渉の種類と程度に応じた群落が、その土地のポテンシャルな能力の許容する範囲内で生育している。